

国際連合食糧農業機関 駐日連絡事務所所長 日比絵里子氏 メッセージ

本日は「国際果実野菜年 2021 WEB シンポジウム もっと果物と野菜を！～健康的な食生活と行動変容を考える～」の開会のご挨拶をさせて頂くことを、大変光栄に思っております。

今年は国際果実野菜年 2021 です。2019 年の国連総会にて採択されました。

当時はまだ新型コロナウイルスの感染拡大の前の時期でしたが、その後、このパンデミックによってサプライチェーンの寸断や混乱が起これ、傷みやすい野菜や果実の流通に影響がでるといふ事態がございました。

実は、この、新型コロナウイルス感染拡大の影響により、社会の飢餓状況はさらに悪化しました。2020 年には、最大 8 億 1100 万人が飢餓に苦しんでいると、FAO は試算しています。この数値は、ここ数年増加しています。SDGs は 2030 年までに飢餓人口を 0 にすることを目指していますが、まさに逆行しているのです。

この背景には、紛争、気候変動のような環境問題、そして経済ショックという要因があります。さらに心配なのは栄養不良という課題です。バランスの取れた栄養価の高い食事を食べられない人は、世界で約 30 億人います。5 人に 2 人くらいの割合です。注目すべきは、栄養価の高い食事が、カロリーを満たすだけの食事よりも 5 倍の値段がかかってしまうという経済的な要因です。供給価格の問題だけでなく、むしろ貧困や社会格差などの消費者側、需要の側の問題もあります。その結果、肥満、低栄養、微量栄養素の欠乏などの様々な栄養不良の問題が世界で顕在化しています。

野菜や果実は、栄養バランスの取れた健康的な食事に不可欠ですが、今日の世界においては、経済的には手の届かない高級品となりつつあるのです。

実は私、昨年夏、4 年間過ごしたサモアから帰国しました。日本で最も驚いたのが、多種多様な野菜や果実が比較的安価で、年間、安定的に供給されていることです。旬や季節性、生物多様性にも貢献している郷土野菜へのこだわり、食を通じる伝統文化、自然や風土にこだわる生産や加工、このような思いのこもった、多種多様な野菜や果実の旬のおいしさを味わうことこそ真の贅沢・豊かさだと認識しました。この豊かさを支えているのは野菜や果実の生産や加工や流通・販売に関わっている方々、フードヒーローの皆さまです。一方で消費者の方々の嗜好や行動が生産や流通、販売を形づくっているとさえいえます。

国際果実野菜年 2021 は野菜・果実の栄養に関する認識を高めてもらい、健康的な食事とライフスタイル促進する、ロスや廃棄を減らすことを目指しています。FAO はこの国際年実施の担当国連機関ですが、心強い助っ人が加わりました。ピーターラビットです。果物や野菜をもっと食べ

よう、地元の旬のものを買おう、家で野菜や果物を育てよう、食べ物を無駄にしたらダメ、など世界で呼びかけています。

＜特別映像：フードヒーローになろう！ピーターラビット2＞の動画（ピーターラビットが国際連合、国連食糧農業機関、国連財団と協力。持続可能な食料環境をめざして「フードヒーローになろう！」と呼びかける グローバルキャンペーンを展開）

国際年のメッセージは他に、農場から食卓まで、サプライチェーン全ての段階を観点に入れ、ロスや廃棄を減らすための技術やインフラの向上の推奨、品質や食の安全への注意喚起、生産者とそのコミュニティーの生計や生活の質の向上という観点、持続可能な地域資源の管理と、農業生物多様性の保全などにも言及しています。

来月総会が行われる国連本部で世界食糧システムサミットが開催されます。食料の生産、流通、加工、消費、廃棄などシステム全体を包括的に捉え、持続可能なものへの変革の合意を固めるのが目的です。どうしたら野菜・果実の生産の向上ができるのか、野菜・果実のロスや廃棄を減らしていくのか、摂取を増やすことができるのか、摂取やアクセスの格差を無くすのか、気候変動を含め、持続可能な環境を実現するのか、日本においても世界においても野菜・果実を含む食料の課題はますます重要になります。

国際年がきっかけとなり、日本や世界における飢餓や栄養の問題に関して新しい提言と行動に繋がることを期待して、ピーターラビットとともに、冒頭の挨拶に代えさせていただきます。